

# 田んぼとお米を民の手に取り戻す 「米の地元学」

評者 小谷あゆみ（農ジャーナリスト）

20年前、中山間地の生き残りをかけて始まった「鳴子の米プロジェクト」。この活動に消費者は登場しない。出てくるのは「つくり手」と「食べ手」という当事者であり、互いが「つながる」ことで動き出す「ごはん」の物語だ。

きっかけは国が規模拡大を掲げてつくった品目横断的経営安定対策。2007年の導入を前に宮城県旧鳴子町役場（現大崎市役所）職員の安部祐輝さんは悩んでいた。小規模農家の多い鳴子地区では、99%が国の支援対象に入らない。それ以前も生産調整の集落説明会を開くたびに「農家は悲しそうな顔ばかりでやる気が失われているようだった」。国の政策からこぼれてしまうこの人たちを元気にすることが「中山間地の役所の仕事ではないか」。そう考えた

ことから物語は動き始める。

寒冷地に適した、冷めてもおいしい米を探し「ゆきむすび」と命名。新品種を誕生させる。農家、旅館の主、地元の人、まちの人、学生などみんなの活躍が頼もしい。地域コミュニティが買い支える農業（CSA）の方式で、当時の概算金の1・5倍の1万8000円でお米を買い取り、2万4000円で予約販売していく。20年続いた理由を安部さんは、「ブランド米にしない。補助金に頼らない。お客さん扱いしない。繰り返し対話を続ける」と振り返る。

この大胆なプロジェクトを提案したのは民俗研究家の結城登美雄さん。地域による地域のための「地元学」の提唱者として知られ、食べる人とつくる人がみんな育てる「生きる希望としての米」を

打ち出した。10万t規模で米を扱う、顔の見えない農政の脆弱さに対して、小さくとも確実にもうひとつの道を切り拓いた。

本書は、田んぼのお米という地域固有の恵みを、市場経済任せの巨大なシステムから民の手に取り戻した「米の地元学」運動の軌跡である。鳴子ではこの春も50人余りが参加するにぎやかな田植え交流会が開かれる。さあ、あなたの田んぼでも「つながるごはんプロジェクト」を始めませんか。

## 『つながるごはん つくり手と食べ手をむすぶ鳴子の米』

農文協 編  
農文協 1760円（税込）

